Osaka University Knowledge Archive

Title	織田作之助全集未収録作品紹介（二）：「一流の鑑賞」
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2018, 16, p. 53-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68149
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

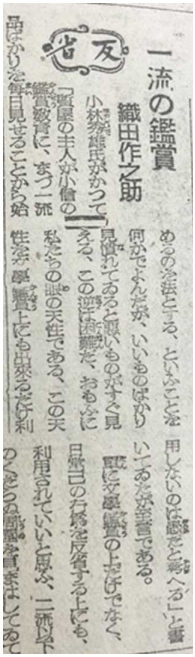
《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介（二）「一流の鑑賞」

斎藤 理生

一 「大阪新聞」における「反省」欄

前号に引き続き、織田作之助の全集未収録作品を紹介する。一九四四（昭和一九）年六月一三日付「大阪新聞」第四面「反省」欄に掲載された随想「一流の鑑賞」である。

これまで大谷晃一『織田作之助――生き愛し書いた』（沖積舎、一九九八）、浦西和彦編『織田作之助文藝事典』（和泉書院、一九九二）、山内乾史「織田作之助著述一覧稿（Ⅰ）～（Ⅳ）」（「近代」一九九五・九～一九九七・三）、関根和行『増補版 資料織田作之助』（日本古書通信社、二〇一六）など、先学による年譜や著作目録において、「反省」という文章の存在そのものは指摘されていた。しかしその内容だけでなく、正確なタイトル、発行日なども不明であった。なお、「大阪新聞」は尼崎市立図書館で原紙を閲覧した。


反省
一流の鑑賞
織田作之助
小林秀雄氏がかつて「質屋の主人が小僧の鑑賞教育に、まづ一流品ばかりを毎日見せることから始めるのを法とする、といふことを何かでよんだが、いいものばかり見慣れてゐると悪いものがすぐ見える、この逆は困難だ、おもふに私たちの眼の天性である、この天性を文学鑑賞上にも出来るだけ利用しないのは惑を考へる」と書いてゐるが至言である。
軍に文学鑑賞の上だけでなく、日常己の行為を反省する上にも、利用されていいと思ふ、二流以下のくだらぬ問題を見まはしてゐて

織田作之助「一流の鑑賞」

小林秀雄氏がかつて「質屋の主人が小僧の鑑賞教育に、まづ一流品ばかりを毎日見せることから始めるのを法とする、といふことを何かでよんだが、いいものばかり見慣れてゐると悪いものがすぐ見える、この逆は困難だ、おもふに私たちの眼の天性である、この天性を文学鑑賞上にも出来るだけ

利用しないのは愚だと考へる」と書いてゐたが至言である。単に文学鑑賞の上だけでなく、日常己の行為を反省する上にも、利用されていいと思ふ、二流以下のくだらぬ周囲を見まはしてゐては折角の反省もやつと二流に到達出来るだけの効果しかもたらさない。

時に自分を天才だと思ふことは良いことである。何故なら、天才と思へば、それだけの（天才にふさはしいだけの）努力をしなければならぬからだ。（筆者は小説家）

「大阪新聞」に「反省」という題のコラム欄が設けられたのは一九四四年六月一一日からで、魚澄惣五郎の「まなびの道」という文章が掲載された。次に一三日に作之助の「一流の鑑賞」が載った。以下、木谷蓬吟「『近畿』の文字」（六・一四）、村上忠久「映画の製作」（六・一六）、藪重孝「「根」あるもの」（六・一七）、下店静市「日本の歴史」（六・一八）、青木大乗「活動と静観」（六・二〇）、和辻春樹「量産」（六・二三）、青木月斗「不精者」（六・二四）、澤瀉久孝「弛んだ胃袋」（六・二五）、宮武辰夫「お守札」（六・二七）、前川佐美雄「言葉を正す」（六・二八）、五十嵐播水「不易流行」（六・三〇）と続いた。

「一流の鑑賞」において注目される点は二つある。一つは、四〇〇字詰原稿用紙一枚分の短い随想において、小林秀雄の文章の引用が三分の一以上を占めていること。もう一つは、「二流文楽論」（「改造」一九四六・一〇）で「二流主義」を標榜したことで有名な作之助が、この時期に「一流」の重要性について語っていることである。

二　織田作之助と小林秀雄

「一流の鑑賞」に引用されている小林秀雄の文章は、「作家志願者への問言」（「大阪朝日新聞」一九三三・二・一二、一四～一五）の一部である。そこで小林は次のように書いている。

> 1　つねに第一流作品のみを読め
>
> 質屋の主人が小僧の鑑賞眼教育に、先づ一流品ばかりを毎日見せることから始めるのを法とする、といふことを何かで読んだが、いいものばかり見慣れてゐると悪いものがすぐ見える、この逆は困難だ。惟ふに私達の眼の天性である。この天性を文学鑑賞上にも出来るだけ利用しないのは愚だと考へる。かうして育まれる直感的な尺度こそ後年一番ものをいふ。

織田作之助は「小林秀雄氏の文学評論はランボオ論以来ひそかに熟読した」（「わが文学修行」、「現代文学」一九四三・三）という。実際、作家として出発する以前の「シング劇に関する雑稿」（「嶽水会雑誌」一九三二・一二）で小林の「心

理小説」（「文藝春秋」一九三一・三→「詩と詩論」一九三一・六）に言及し、「戯曲論序説」（「嶽水会雑誌」一九三三・一二）で「小説の問題 Ⅱ」（「文藝春秋」一九三二・六）の一節を引用している。作家になってからも「文楽的文学観」（「京都帝国大学新聞」一九四三・三・五）で「鏡花の死其他」（「文藝春秋」一九三九・一〇）を、「一つの問題」（発表誌名・発表年月不詳）で「事変の新しさ」（「文學界」一九四〇・八）を、「肉声の文章」（「都新聞」一九四六・七・三一）で小林秀雄・林房雄・淀野隆三・伊吹武彦「座談会 偉大なる魂に就て」（「世界文学」一九四六・七）における小林の発言を取りあげている。作之助は作家生活を通じて、小林の言説を足がかりに自らの思想を述べていたのである。

また、言及はしていないものの、明らかな影響を見て取れる例もある。作之助は「ジュリアン・ソレル」（「世界文学」一九四六・一〇）において「要約できないといふのは、つまり、一流作品の魅力を具へてゐるといふ意味だ」と書いている。これは、先述の「文楽的文学観」でも引用している「いい小説が再読三読に堪へるといふ事は、言ひ代へれば、これを理解しようとしてこれを別の形式に要約して了へない、要約する必要もないといふ事に他ならぬ」という小林の「鏡花の死其他」の一節によく似ている。

大阪府立中之島図書館の織田文庫には、『続文藝評論』（白水社、一九三二）、『続々文藝評論』（芝書店、一九三四）、『様々なる意匠』（改造社、一九三四）、『歴史と文学』（創元社、一九四一）、『無常という事』（創元社、一九四六）という、五冊の小林の著作が所蔵されている[1]。「作家志願者への助言」は『続々文藝評論』に収録されているため、作之助はここから引き写したのだと推測される。

作之助の日記や書簡からも、小林の著作を読んでいた形跡はうかがえる。『定本織田作之助全集 第八巻』（文泉堂出版、一九九五）によれば、一九三八年三月二九日の日記に、「アシルと亀の子Ⅴ」（「文藝春秋」一九三〇・八）の一節を引き写している。また、一九三九年六月一六日付品川力宛の書簡では『ドストエフスキイの生活』（創元社、一九三九）を読んでいると記している。同書は、この年の五月に刊行されたばかりであった。

作之助は三高生だった頃に、小林秀雄に接したこともある。伊吹武彦の回想によれば、作之助は「文芸部で講演会をやる話があって、ぜひ小林秀雄を呼びたい」として伊吹に仲立ちを頼み、講演の際にはタイミングよく小林に煙草をささげたという（伊吹「織田作の〝気ィつかい〟」（『定本織田作之助全集』第一巻、文泉堂出版、一九九五・三）。

「一流の鑑賞」は、以上のような作之助の小林への傾倒がうかがえる文章のひとつだと言えよう。

しかし、作之助は晩年の評論「可能性の文学」（「改造」一九四六・一二）では、「小林秀雄が志賀直哉論を書いて、彼

の近代人としての感受性の可能性を志賀直哉の眼の中にノスタルジアしたことは、その限りに於ては正しかつたが、しかし、この志賀直哉論を小林秀雄の可能性のノスタルジアを見ずに、直ちに志賀直哉文学の絶対的評価として受けとつたところに、文壇の早合点があり、小林自身にも責任なしとしない」と述べている。少なからぬ配慮をしながらではあるが、小林を批判していることは間違いない。

もっとも、先にも触れたように、作之助は四ヶ月前に発表した「肉声の文章」では、「座談会 偉大なる魂に就て」における小林の発言を引用し、「誰もかれも肉声でものをいはなくなり、社会の約束に応じて取引されるうちに、石ころのやうになつてしまつたコチコチの言葉で、ものを言ひ、ものを書くやうになつてしまつた」現在において、「肉声」を発している稀少な存在として小林を評価している。作之助は、戦後も小林への見方を大きく変えていないようである。では、「可能性の文学」の主張の背後には、どのような考えがあるのだろうか。

三 「一流」と「二流」

かつて作之助は「編輯後記」（「大阪文学」一九四二・一〇）で次のように書いていた。

何を書き、何う書くかといふことは人さまざまではあるが、一流作品だけはかくあるべしと命令形をもつてゐる。今日文学の衰微がいはれるのは、一流作品がないからである。

こうした「一流」を希求する思いが「一流の鑑賞」に引き継がれ、「一流」のものに積極的に触れ、あえて「自分を一流のやうに思ひ込んで」努力しようという訴えにつながっていたはずである。ところが、晩年の作之助は「いわゆる一流主義に対する二流主義、英雄主義に対する凡俗主義」として「二流文楽論」を書いている。「語られる人もいはゆる二流だが、語る私も二流だ」というばかりか、「文楽が二流藝術であると同様に、この国の文学もまた二流である。すべて二流だ」と断じて、「この国では一流作家が多すぎる。しかし、彼等は社会的には一流かも知れないが、文学的には全部二流なのである。そして絶対に一流たり得ないのだ」と批判する。「一流たり得ないとは、実にわれわれが生れながらにして背負つてゐる宿命なのだ」という主張と、「二流以下」と同じにならないように「一流」に触れ「自分を天才だと思ふ」ことさえ奨励していた「一流の鑑賞」との差は大きい。

「二流文楽論」と同時期に執筆された「夜の構図」（「婦人画報」一九四六・五～一二）でも、主人公の劇作家である信吉が、次のように述べる場面がある。

僕は天才ぢやない。僕は、ただ二流劇作家なのです。逆立ちしたつて、一流になれません。天才ぢやないからです。しかし、天才は百年に一人しか現はれません。僕が百年に一人しか生れない人間だからつてそれが僕の責任でせうか。日本には天才はゐませんよ、みんな二流です。ただ、誰もおれは二流だとはつきり言ふ度胸を持つてゐないだけです。二流であることも自覚せず、何だか一流の真似をしてゐるつもりだが、悲しいかな天才ぢやない。二流だと自覚して、その限界で仕事してゐる方が気が利いてゐますよ。文壇でも劇壇でも二流しかゐない。批評家も二流です。二流だが、一流のものを読んでゐるおかげで、自分を一流のやうに思ひ込んで、二流を一流でないといふ理由でこき下してゐて、そうして、こき下されたものが狼狽してゐるのが、日本の文壇、劇壇の現状ですね。

「一流」「二流」「天才」といった、「一流の鑑賞」と同じ語が用いられているだけに、そこで語られている内容の隔たりが強く感じられる。

『夜の構図』の信吉は、「二流」を自称することで居直っているように見える。ただし『夜の構図』においては、語り手が信吉について「むろん、彼は一流文学の観念を信じてゐる。しかし、その観念を説く人を信用しない。その人が一流でないといふ点を、あるひは滑稽に、あるひは不愉快にかぎつけるのだ。だから、敢て二流論を宣伝するのだが、しかし、かういふ主張はすまじきものであらう。しかも、無駄な努力である」と述べている。おそらく作之助の考えは、信吉ひとりに託されているわけではなく、このように主人公を相対化する語り手との間にある。大谷晃一前掲書によれば、作之助は「日本工業新聞時代に親しかった広田万寿雄」に対して「おれは『二流文楽論』を書くよって、お前はこれをたたけ。その原稿をどこかの雑誌へ売り込んだるわ」と述べたという。大谷が言うように、作之助は「逆上していたようでいて、実は話題を大いにわき立たせることを、ちゃんと計算していた」のである。「二流文楽論」や「可能性の文学」は、その要所要所に凝らされた工夫から考えても(2)、生(なま)の主張が剥き出しにされているわけではなく、あえて先鋭化させて世に問うていると見るべきだろう。

戦時中までは「一流」を肯定していた。しかし戦後になって「一流」を否定し、「二流」を肯定するようになった。一見そのような単純な変化に見えなくもない。しかし作之助の考えはもう少し複雑であろう。むしろ彼は戦後になって、「一流」と「二流」とを分類する枠組みや、「一流」や「二流」の主張の仕方、語り方そのものに焦点を当てて、問い直そうとしているように見える(3)。

作之助は大阪を愛しながらも東京にこだわった。サルトル

に関心を寄せながらもスタンダールに惹かれ続けた。「二流」と「一流」をめぐる作之助の振幅は、そうした彼の内面のゆらぎに対応しているはずである。「一流の鑑賞」は、その一つの指標として見過ごせない価値を持つ資料である。

注

（1）これらの本には、赤鉛筆や青インクで傍線が引かれている箇所が多数見受けられる。ただし、作之助の手になるものであるか否かは定かではない。

（2）拙稿「方法としての坂田三吉――織田作之助の作品と将棋――」（「日本近代文学」二〇一七・五）を参照されたい。

（3）作之助の「二流」について、よりくわしくは尾崎名津子「変奏される〈悲しみ〉――坂口安吾の大阪観」（「坂口安吾研究」二〇一七・三）を参照されたい。

〈付記〉本研究はJSPS科研費 17K02450の助成を受けたものです。

（さいとうまさお／本学准教授）